

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」

[掲載日] 2015年9月17日

[テーマ] 経済活動—評価の視点に「水準」と「変化」—

「景気は回復していると言うが、そうした実感はない」。県内各所を回っているとこんな指摘をちょうだいすることが少なくない。

もっともなご指摘だ。リーマン・ショック後の未曾有の落ち込みからは持ち直したとは言え、経済活動の「水準」は高いとは言えない。多くの人が回復を実感するには、水準がもっと高まらないといけない。なお道半ばなのである。

実は経済活動を評価する視点には、「水準」と「変化」の二つがある。政府や日銀の景気判断はいずれも「緩やかな回復」だが、経済の水準が徐々に上がっているという「変化」のみを言及している。

一方、一般の方は景気が良いのか、悪いのか、その「水準」を意識、関心を持っている。政府や日銀の判断は「水準」について言及していないので、現状は、やや楽観的に聞こえるのではないだろうか。より丁寧な説明が求められていると言えよう。

どうしてこんな小難しい話を始めたのか。

都道府県や主要都市を対象としたランキングの群馬県や県内各都市の順位の低さをみて、「水準」と「変化」を区別して考えることが重要だと、改めて感じたからである（本当は憤っている！）。

経済的な豊かさは、ストックの水準によって測られる。例えば、金融に関する豊かさは、単年度の貯蓄額ではなく、過去からの蓄積である金融資産額で測り、住宅に関する豊かさは、単年度の着工戸数ではなく、現存する住宅の価値で測ることになる。

各種ランキングについても、魅力度ランキング、住みよさランキングと言え、一見「水準」を評価しているようにみえる。

ところが、ランキング作成時の評価項目をみていくと、ストックよりもフロー、すなわち「変化」の指標が多く含まれていて、必ずしも「水準」の評価になっていない。

理由は明確だ。「水準」のランキングを厳密に作ると、上位の顔触れに意外感はなく、つまらないランキングになるからだ。

また、大きくは変化しないので、毎年ランキングを作り直す意味はない。

もとより、自分のまちの素晴らしさを知るのは、そこに住む住民だけである。ランキングは一つの試みに過ぎず、その内容に目くじらを立てるべきではない。

仮に自分のまちのランキングが低くとも、それは必ずしも「水準」の低さを表しておらず、せいぜい「変化」の方向がやや下向きになっている程度に受け止めれば良い。そのうえで、自分のまちの素晴らしさを維持する、さらに高めていくにはどうしたら良いか考える。それが「地方創生」の第一歩になると思う。

#### ■政府・日銀の景気判断

政府 (8月の内閣府月例経済報告)	景気は、このところ改善テンポにばらつきもみられるが、緩やかな回復基調が続いている
日本銀行 (9月の金融経済月報)	わが国の景気は、輸出・生産面に新興国経済の減速の影響がみられるものの、緩やかな回復を続けている
日本銀行前橋支店 (9月の群馬県金融経済概況)	県内景気は、緩やかな回復基調にある

日本銀行前橋支店長  
神山 一成